

黛敏郎の秘曲 SHOTA EZAKI plays TOSHIRO MAYUZUMI

01 黛敏郎編曲版「君が代」* (3:09)

ピアノのための12の前奏曲 作品0

02 I「行進曲 ハ長調」 (1:03)

03 II「アラベスクイ短調」 (1:04)

バレエ「かぐや姫」のスケッチによる3つのシーン

04 石の花簾の踊り† (1:47)

05 金の枝の踊り (1:16)

06 鳳凰の踊り† (4:08)

ウェディング・シンフォニー*

07 M1 入場 「きらめく光の中で」 (3:12)

08 M2 ケーキ人刀 (前半) 「夢ときめく頃」 (3:28)

09 M3 ケーキ人刀 (後半) 「夢ときめく頃」 (2:50)

10 M4 乾杯 「希望とともに」 (3:27)

11 M5 色直し中座 「あゆみ」 (3:42)

12 M6 色直し入場 「朝もや」 (3:46)

13 M7A キャンドルサービス 「月の光をあびながら」 (4:04)

14 M7B メインキャンドル点火 「愛の光につつまれて」 (3:25)

15 M8 子供からの花束 「夢みる天使」 (2:40)

16 M9 花束贈呈と謝辞 「メッセージ」 (4:24)

17 M10 送賓 「明日を見つめて」 (2:42)

18 O系新幹線放送メロディ (0:18)

19 マルチピアノのためのカンパノロジー (6:03)

20 PASSACAGLIA 「絶筆」† (4:02)

ピアノ:江崎昭法

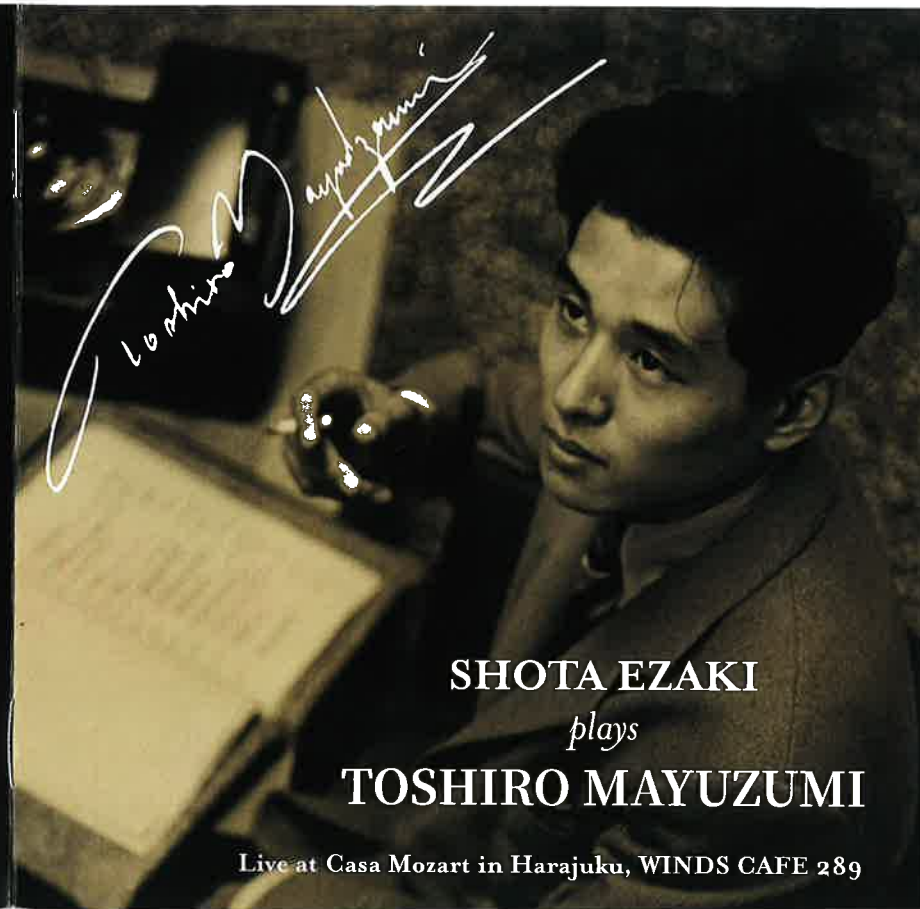
* 江崎昭法によるピアノ1台・4「連弾のための編曲

† 江崎昭法によるピアノ独奏のための編曲

‡ 世界初録音



ピアノを弾く黛敏郎



SHOTA EZAKI
plays
TOSHIRO MAYUZUMI

Live at Casa Mozart in Harajuku, WINDS CAFE 289

CDについて

「黛敏郎の秘曲 — 江崎昭汰のピアノ演奏による」は、ピアニスト江崎昭汰の演奏、西耕一の企画、WINDS CAFEの共催として、計画されました。しかし、開催予定の2021年1月31日が緊急事態宣言の自粛期間中になってしまったため、無観客公演として録音となりました。会合や移動が制限されるなか、年齢や住いなどによる制限を取り払い、一人でも多くの方に、心配なく、音楽に触れる機会を作りたいと考えた結果でした。結果的には、100人ほどの方々に無観客公演を御支援して頂けることとなりました。

無観客公演された作品はすべて黛敏郎の作品です。元からピアノ曲として作曲されたものだけでなく、本公演のピアニストの江崎昭汰によるオーケストラ曲からのピアノへの編曲や、4手連弾による編曲を含む選曲となりました。

会場は、録音のためのスタジオとは違ってサロン的スペースである「カーサモーツァルト」。限られた時間での収録となったこともあり、ライブの勢いを失わないよう複雑な編集をせずに、あくまでも無観客ライブのレコーディングとして行いました。そして録音による公演ということを取って、1人の奏者がプリレコーディングのピアノに重ねて4手連弾を演奏する試みもありました(2人で弾かないで密を避ける意図もありました)。

改めて振り返ると、非常時下、通常ではありえない状況での公演でした。会場には、演奏の江崎昭汰、録音の磯部英彬、企画の西耕一という3人に加え、調律師が立ち会い、最小限人数で無観客公演が粛々とすすめられました。終演後に各自が帰宅を済ませたのは午後8時だったことも、お知らせしておきたいことです。

最後に、会場を貸してくださったカーサモーツァルトさん、そしてWINDS CAFEの無観客公演として開催を認め、後押しして下さった川村龍俊氏、無観客公演へ御支援を下さった多くのお客様にこの場を借りて深く御礼致します。

(企画:西耕一)



秘曲について

演奏会シリーズ「WINDS CAFE 289」に出演するのは今回で2回目となります。このシリーズの私が出演する回は、西耕一さん企画の「日本の作曲家 秘曲探訪 — スリーシェルズ音楽祭」とのタイアップ企画となっています。大変ありがたいことに、スリーシェルズ音楽祭には、第1回目から演奏者として出演することができ、これまでに黛敏郎はもちろん、平尾貴四男、諸井三郎、松村禎三、芥川也寸志、高木東六、木山光などの日本人作曲家のピアノ作品を取り上げてきました。

私がピアノの学習を本格的に始めたのは小学6年生の頃でした。その頃から、インターネットを通して誰も見向きもしないであろうピアノ作品に魅了され、英和辞書を片手に海外の楽譜通販サイトを駆け回りました。そして、手にした楽譜を大変拙い初見ながらも音にすることが日課となっていました。この日課はかれこれ20年ほど続いています。

2019年の夏頃、西耕一さんから「滅多に取り上げられない日本人作曲家の作品のみを演奏する演奏会に出演しませんか?」とお声がけいただいた時は、天にも昇る心地でありました。それが「日本の作曲家 秘曲探訪 — スリーシェルズ音楽祭」です。2021年現在、日本の音楽界を支えてきた作曲家やそのご遺族たちも時の流れと共にこの世を去り、同時に作品も日の目を見ることなく失われている現実があります。そのような一刻を争う時代、日本の作曲家たちが残してきた軌跡を次世代に引き継ごうと日々奔走されているスリーシェルズ代表の西耕一さん。彼との出会いは私がこれまでに膨大な時間を費やし「秘曲」を追い求めながらも、日本人作曲家

たちが残してきた作品には全く意識を持っていなかったという事実への気付きのきっかけとなりました。

今回のCD収録楽曲は、西耕一さんから見せてもらった世に出ていない黛の貴重な自筆譜複写をもとに熟考しました。黛は常に時代の先駆者であり続け、新しい響きをもとめ電子音楽やジャズ、民族音楽、映画音楽という多種多様なスタイルを我がものとして数多くの作品を生み出しました。中でも知る人ぞ知る「ウェディング・シンフォニー」には、黛が抱いていた日本文化の様式美、伝統に対する思いが詰まっています。そのような特別な作品をピアノでも演奏してみたいと思い立ったことから、約1ヶ月ほどかけ原曲に忠実なピアノリダクション版に書き下ろしました。そのほか、黛敏郎編曲版《君が代》や惜しくも絶筆となった《PASSACAGLIA》など滅多に聴くことのできない作品を収録し「黛敏郎の秘曲」と呼ぶに相応しいCDを目指しました。

セルゲイ・ラフマニノフが“Music is enough for a lifetime, but a lifetime is not enough for music” (音楽は人生を満たすに十分であるが、人生は音楽を満たすに十分ではない)と語ったように、人間に与えられた時間の中で世界に散らばる全作品の真髄を知ることとは不可能です。そこには、どこか寂寥感が漂います。しかし、知られざる作品の発見とは何事にも代えがたく人生をより豊かにするものだと思っています。これからも、時間の許す限り「秘曲」の紹介を生涯のライフワークとして続けていくつもりです。

皆様がこのCDをお楽しみいただけることを願っています。今回の企画の実現のためにご尽力いただきました川村龍俊さんや西耕一さん、関係者の皆様、そして無観客公演へ御支援くださったお客様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

江崎昭汰 (2021年3月20日・東京)

黛敏郎とピアノ曲について

黛敏郎にとって、主なピアノ作品は10代から30代にかけて作曲されたものが中心となる。最初のピアノ作品は神奈川県立横浜第一中学校を卒業して、東京音楽学校へ入学した1945年4月から書き始められ、多彩な楽想がきらめく《12の前奏曲》。翌年の《ポエジー・メランコリック》（現在は譜面が行方不明）。1947年、戦後の混乱のなか、昼は音楽学校でクラシックを学び、夜は進駐軍の米兵も集うジャズクラブでピアノを弾いてアルバイトをして身につけたジャズの書法を発揮した《オール・デューヴル》。実際には上演されなかったバレエのための音楽スケッチとして1949年頃に作曲された《かぐや姫》。1965年に、半年近くローマに滞在して作曲と録音を繰り返しながら書いた映画《天地創造》のピアノリダクションによる組曲までの約20年間の創作が主なピアノのための作品である。新たな音響の開拓に取り組んだ1957年の《プリペアド・ピアノと弦楽四重奏のための作品》、1967年の電子音響的な操作を伴う《マルチピアノのためのカンパノロジー》、1991年の《電子ピアノとオーケストラのための21世紀のためのラブソディ》などもあるが、アコースティックなピアノだけで演奏されるソロ曲としては、初期の20年に出揃っており、黛の創作人生のなかでも特に急速な成長を重ねた時期の創作として、他の作品と対照させつつ捉えることもできるだろう。

そのようなことを踏まえて、これまでにディスク化されたことのない、演奏会で取り上げられることも少ない作品を知って頂く機会にしたい、と考えて選曲を行った。その結果、演奏者の江崎昭汰が自ら編曲した作品も含まれることになった。



楽曲解説

黛敏郎編曲版《君が代》

雅楽の響きを意識して「黛敏郎がかくあるべし」とオーケストレーションを施した管弦楽版《君が代》から、今回、江崎昭汰の手によってピアノ連弾に編曲されたものの。テレビ番組『題名のない音楽会』で1984年1月15日に放送されたほか、詳細な情報については不明である。

《ピアノのための12の前奏曲》作品0

黛敏郎の作品第0番《12の前奏曲》から第1曲「行進曲」、ハ長調と第2曲「アラベスク」、イ短調。自筆譜には、1945年4月作曲、1946年6月作曲とある。現在残る最古の黛敏郎の作品である。

《バレエ「かぐや姫」のスケッチによる3つのシーン》

なんらかの理由で上演されず、ピアノスケッチだけが残されていたバレエ音楽。これまでは《金の枝の踊り》だけが全音ピースとして出版されていたが、1949年11月号(第4号)の『上野』(東京音楽学校関係者によるエッセイや作品を掲載した非売品の文集冊子)の楽譜付録に、《石の花瓶の踊り》《金の枝の踊り》《鳳凰の踊り》の3つが、自筆のガリ版刷りで添付されていたことから、新たに3つの組曲として復元されたもので今回が初録音となった。

《ウェディング・シンフォニー》

1987年の作品。結婚式場で使われるBGMとして作曲依頼を受けた合唱付きのオーケストラによる音楽である。「新郎新婦入場」「ケーキ入刀」「乾杯」「色直し」「花

束贈呈」など、結婚式の様々なシーンに合うように作曲されている。今回の録音のために江崎昭汰によって新たに編曲された。

《0系新幹線放送メロディ》

列車の車内放送アナウンスの前に流れる音楽をピアノで演奏したものである。1964年10月に開業した東海道新幹線では、当初「鉄道唱歌」が車内放送アナウンス前に使われていたのだが、時速200キロの超特急に相応しい曲をと新たに作曲されることになった。白羽の矢が立ったのは黛敏郎。1964年の東京オリンピックの開会式・閉会式で再生された電子音楽によって世界的な知名度を誇る黛敏郎によって「新幹線のスピード感と近代性を表現した」曲が作られ、車内放送のアナウンス前に使われた。



《ピアノのための12の前奏曲》— 自筆譜表紙

《マルチピアノのためのカンパノロジー》

マルチピアノとは、通常のピアノの弦にマイクをセットして、ピアノ線の振動を電氣的に変調させたり、フィルターを掛けたりして音色の拡大を狙ったピアノのこと。本来のピアノの音ではなく、電氣的に加工、変調された音が5個のラウドスピーカーによって出てくる仕様だった(今回は、収録後に加工を加えて、ステレオに変換している)。

黛敏郎の考案によってNHK電子音楽スタジオが作ったマルチピアノ第1号のための作品がこの曲である。テンポ、タッチ、ダイナミクスなど人間だから可能になる微細にして複雑なニュアンスと、電子的変調による音色の拡大が融合される。人間と機械の両方の利点を取り入れようとした黛敏郎らしい発想である。

なお、カンパノロジーというのは、黛敏郎にとって、梵鐘の音に触発された音響探求の取り組みの総称である。それゆえに、直接的に鐘の音響を模した作品ということではなく、作曲の態度や構造的など、様々な部分で、東洋的な発想によるアプローチが行われている。1967年に放送初演が行われて以降ほとんど埋もれたままになっていたものを復元しての演奏となった。

《PASSACAGLIA》

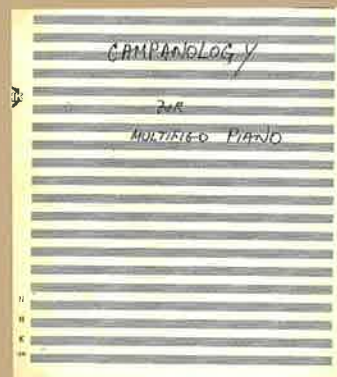
オーケストラ・アンサンブル金沢のコンポーザーインレジデンスとして委嘱を受け、当初は、プリベアド・ピアノとオーケストラの協奏曲として構想されていたが、ピアノソロに入る前で未完成のままとなった。その理由は、1997年4月10日、作曲者の死によって未完成に終わったからである。曲はレントで重厚に、しかし幻想的な雰囲気を持ち始まる。最初はハーブ、チェロ、コントラバスが静かに加わり、次第に弦や木管楽器が増えて金管楽器が入る。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ワーグナー等、クラシックの泰西名曲が走馬灯のようにあられ消える。

大きな盛り上がりを経た後に、トランペットだけになり62小節目で途切れる。演奏時間にして4分ほど。

この録音のために江崎昭汰によってピアノ連弾に編曲された。

使用楽譜

黛敏郎編曲版《君が代》…編曲者自筆譜(合同会社ミュージズ・プレス刊行予定)
《ピアノのための12の前奏曲》作品0…合同会社ミュージズ・プレス刊行(2019年)
《バレエ「かぐや姫」のスケッチによる3つのシーン》…1949年11月号(第4号)文集冊子『上野』(非売品)
《ウェディング・シンフォニー》…編曲者自筆譜(合同会社ミュージズ・プレス刊行予定)
《0系新幹線放送チャイム》…合同会社ミュージズ・プレス刊行(2019年)
《マルチピアノのためのカンパノロジー》…私家版(未出版)
《PASSACAGLIA》…編曲者自筆譜(合同会社ミュージズ・プレス刊行予定)



《マルチピアノのためのカンパノロジー》— 自筆譜表紙

黛敏郎

1929年(昭和4年)2月20日、横浜生まれ。東京音楽学校(東京藝術大学)で橋本國彦、池内友次郎、伊福部昭等に師事。1948年(昭和23年)に作曲した「拾個の独奏楽器の為のディヴェルティメント」により才能を認められる。1950年(昭和25年)作曲の「スフェノグラム」は、翌年のISCM国際現代音楽祭に入選して海外でも知られるようになる。1951年(昭和26年)パリ・コンセルヴァトワールへ留学、トニー・オーバン等に学ぶ。フランスから帰国後、ミュージック・コンクレートや日本初の電子音楽を手がけた。1953年(昭和28年)芥川也寸志、團伊玖磨と「3人の会」を結成。また、吉田秀和等と「二十世紀音楽研究所」を設立。雅楽・声明をはじめ、日本の伝統音楽にも造詣を深める一方、交響曲、バレエ、オペラ、映画音楽等の大作を発表した。1964年(昭和39年)より、テレビ番組「題名のない音楽会」の企画、出演。東京藝術大学講師、茶道「裏千家淡交会」顧問、評議員。「日本作曲家協議会」会長、「日本著作権協会」会長などを歴任した。

「涅槃交響曲」(1958)で第7回尾高賞、「BUGAKU」で第15回尾高賞を受賞。主な作品に「ルンバ・ラブソディ」(1948)、「饗宴」(1954)、「曼荼羅交響曲」(1960)、「シロフォン小協奏曲」(1965)、オペラ「金閣寺」(1976)、「KOJIKI」(1993)、バレエ「The KABUKI」(1986)「M」(1993)他がある。ピアノ曲は、「前奏曲」金の枝の踊り「天地創造」などがある。ISCM入選(昭和31、32、38年)。毎日映画コンクール音楽賞(昭和25、32、38、40年)。毎日演劇賞(昭和33年)。ブルーリボン賞(昭和40年)。仏教伝道文化賞(昭和50年)。紫綬褒章(昭和61年)。1997年(平成9年)4月10日逝去。

